

序文

「仕事は見て盗め」と言われている。筆者が外科医になった1990年代初頭は内視鏡外科手術は今ほど盛んに行われておらず、開腹手術がスタンダードかつ王道であった。オーベンたちの手術が見たくて、術野に覆い被さるようにつま先立ちした数人の外科医が後ろから覗きこんでいる構図が普通であった。しかし、手洗いをして術野に入らなければ手術細部を十分に見ることはできず、「仕事を見て盗む」ことは簡単なことではなかった。もちろん、手術動画などはほとんどなく、手術個々の秘訣は2度と見られないかもしれないので、その場で頭にたたき込み、後で手術書に書き込みなどして自己の手術力を向上させようとしていた。少なくとも、筆者はそうしていた。

内視鏡外科全盛時代ではそのような若い外科医の涙ぐましい努力は、容易かつ濃厚なものへと変化している。手術は映像に映し出され、記録媒体で保存され、若い外科医にとって「仕事は見放題・盗み放題」となり、オーベンは「仕事の秘訣を余すことなく披露しなければならない」時代となった。また、エキスパートの動画を手入れし、手術のイメージトレーニングや予習も可能となり、術者はその日のうちに自らの手術を動画で振り返って反省することもできる。内視鏡外科手術は患者に低侵襲治療の恩恵をもたらしただけでなく、外科医の手術力の向上に大きく寄与してきたことは間違いない。その一方で、内視鏡外科手術では、臓器切除後の再建に関してはいまだ簡単ではない、と感じる局面も少なくなく、再建に伴う合併症もゼロにはならないのが現状であろう。

本書『内視鏡外科消化器再建術のすべて』は、標準的な消化器再建術にフォーカスを絞った内容となっている。従来の文字中心の教科書的な手術書ではなく、直感的に理解できるよう手術のイラストや静止画、それらに付随する解説、さらには再建のエッセンスを凝縮した動画を様々なデバイスで見ることができる構成となっている。執筆は、内視鏡外科領域でわが国を代表するエキスパートをお願いした。ぜひ、エキスパート達の仕事ぶりを何回も見て、大いにその技術を盗んで欲しい。本書が必ずや個々の外科医の手術力を向上させ、少しでもクオリティの高い手術を患者に提供できる一助になることを信じてやまない。

最後に、多忙な診療のなか、ご協力いただいた執筆者の先生方と編集委員の先生方、本書が刊行に至るまで多方面からご尽力いただいた学研メディカル秀潤社の谷口陽一氏に、この場を借りて深謝したい。

2021年8月

編集委員を代表して

阿部展次

杏林大学医学部消化器・一般外科学教室 教授